

2022年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

1. 提出日：2023年5月26日

2. 提出者氏名：児玉谷 レミ

3. 申請した研究テーマ：

ポスト近代の軍隊としての自衛隊の軍事的男性性の構築——自衛官たちの語りから

4. 研究活動報告

本研究では自衛隊を冷戦終結後に台頭した「ポスト近代の軍隊」として位置づけたうえで、自衛官への聞き取りを行い、戦うという行為と男性性がいかに取り結んでいるのか考察した。調査は対面もしくはオンラインによって、1時間10分から最大4時間ほどの半構造化面接法にて実施した。インタビューでは、自衛官となった経緯や自衛隊で勤務するなかで印象的であった出来事、理想とする上司や先輩後輩関係、直面した困難をいかに乗り越えたかなどを尋ねている。

上記に示した調査の結果、組織の理想や自衛官としてあるべき姿においては、戦うという行為と男性性を結び付けるようなありかたが主流であることが明らかとなった。自衛官の語りにおいては、命を懸けることを厭わない勇敢さ・部下を率いるカリスマ的なリーダーシップなどといった性質が語られ、それらは男性的なものとして意味づけられていた。したがって女性隊員はこうした男性的な規範にあわせてふるまうことを求められ、女性的とみなされる性質や行動を自衛官・自衛隊にとって本質的ではないものとして意味づけ、時にそれを排除する形で組織に適合しようとしていた。他方で、戦うという行為と男性性の結びつきが主流であるものの、戦いを回避することと男性性を結びつける語りも得られ、自衛隊の軍事的男性性の様態は一枚岩ではなかった。

さらに調査の結果得られた興味深い点は、テクノロジーの発達や現代戦におけるサイバー領域の重要度が高まった影響からか、通信系の職務（厳密に言えば通信科職種とサイバー防衛隊は職務内容が異なるが）のジェンダー化された意味づけが再編される様子が観察されたことである。例を挙げれば、通信科職種を女性的な細やかな気遣いが発揮されるため女性自衛官に向いている仕事とする語りと、かつては「オタク的」な仕事であったが現在ではサイバー領域の重要性の高まりにより、「エリート」が集まるようになったと評する語りがともに見られた。これは女性的あるいは価値を低められていた職務が男性的で優れたものとして意味づけられていく過程を示していたのではないかと考えられる。

いくつか今後の課題とすべき事柄も出てきたため、以下に述べたい。第一に、調査の結果、他国の軍隊が有するポストモダン的なありかたとの類似性にとどまらず、自衛隊が持つ特異性・固有性が浮き彫りとなった。たとえばポストモダン・ミリタリー論においては、軍隊は冷戦以降、他国に赴き平和維持活動などに従事するために、国際関係論や人類学などの知が重視され、それに伴って特に士官クラスにおいて学者軍人のプレゼンスが高まることが指摘されている。ところが今回の調査においては、他国軍の士官に相当する幹部自衛官が学術的な素養を身に着けることの重要度は、現場で求められる知と比較して低く見積もられることが多かった。また、必要性が語られる場合もあくまで「他国の軍人と対等に渡り合うため」とされていた。なぜそのような異同が生まれるのか、日本の社会的・歴史的な文脈を適切にふまえたうえで、さらに考察を深めていきたい。第二に、自衛隊外部の社会に目を向ける必要性である。すでに

英米圏の研究で指摘されているように、軍事と男性性の結びつきが維持・構築されるにあたっては、軍隊内部の実践のみならず、軍隊外部の社会も影響を及ぼす。自衛官はメディアなどによる自衛隊表象に気を配っており、外部が描く「自衛隊」像と交渉する形でジェンダー化された組織の理想を語っており、自衛隊の軍事的男性性をめぐってもまた同様であると考えられた。今後は自衛隊内部のみならず、外部の社会がどのように自衛隊を描いてきたのか検討していく必要もあるだろう。

他からの助成金を得ることができず、思うように資料の収集や調査を進められないのではないかという不安も大きかったが、今回奨励賞として支援をいただけたことは望外の喜びであった。学会報告や投稿論文によって、調査で得られた成果を還元していきたい。